

病の文学を読む

—正岡子規、ありのままに見る写生の心—

(2)

Reading Literatures Written by Patients

—Shiki Masaoka, the spirit of Shasei (Sketch) seeing things as they are—

(2)

産業医科大学 哲学概論

前田 義郎

University of Occupational and Environmental Health, Japan, Philosophy

MAEDA Yoshiro

Abstract:

Doctors need understand minds of patients in order to practice humane medical cares. A method to understand patients internally is to read literatures or notes written by patients. I want to read essays of Shiki Masaoka and to understand his mind, attitude and worldview.

In this paper, succeeding a precedent paper (1), I want to relive and understand the mind of Shiki at his final stage. He confessed his severe sufferings and wished a release from them. How could he be released from his sufferings? He saw things as they were. This attitude "Shasei" was his own policy as a great poet. He saw social relations as they were, and he found the importance of the women education and discovered the "care" concept in the nursing. Finally he saw his own body and life as they were and he acquired a view of hopeful future.

This is certainly a study focusing on one person. But this method of studying a person has a good advantage of understanding a person internally and deeply. Many trials of this sort of studies will bring about good understandings of suffering patients.

Keywords: 生きる意味 (the meaning of life)、写生 (Shasei)、ケア (care)、希望 (hope)、カント (Kant)

承前*

6. 苦しみの理由

子規の症状が深く危機的になってきた。それと共に精神の危機を思わせる言葉が見られるようになる。病にある人間にとって死の問題は避けて通ることのできない問題であり、死を前にした人間の苦悩や救いは永遠のテーマともいふべきものである。子規にとってもそのような問題が切実なものとして現れてきたということであろう。

病床に寝て、身動きの出来る間は、あえて病気を辛しとも思わず、平気で寝転んで居たが、この頃のように、身動きが出来なくなるとは、精神の煩悶を起して、ほとんど毎日気違のような苦しみをやる。この苦しみを受けまいと思うて、色々に工夫して、あるいは動かぬ体を無理に動かしてみる。いよいよ煩悶する。頭がムシャムシャとなる。もはやたまらなかったので、こらえにこらえた袋の緒は切れて、ついに破裂する。もうこうなると駄目である。絶叫。号泣。ますます絶叫する、ますます号泣する。その苦しみその痛み何とも形容することは出来ない。むしろ真の狂人となってしまえば楽であろうと思うけれどそれも出来ぬ。もし死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである。しかし死ぬことも出来ねば、殺してくれるものもない。一日の苦しみは夜に入ってようやく減じ、わずかに眠気さした時にはその日の苦痛が終るとともにはや翌朝寝起の苦痛が思いやられる。寝起ほど苦しい時はないのである。誰かこの苦しみを助けてくれるものはあるまいか、誰かこの苦しみを助けてくれるものはあるまいか。³¹⁾ (明治35年6月20日)

「いかにして日を暮らすべき」、「誰かこの苦しみを救うてくれる者はあるまいか」ここに至って宗教問題に到着したと宗教家はいうであろう。しかし

* 前田義郎「病の文学を読む -正岡子規、ありのままに見る写生の心- (1)」、『人間と医療』第3号、九州医学哲学・倫理学会、2013年、p.59-70

宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救いの手は届かない。仏教を信ぜぬ者は南無阿弥陀仏を繰返して日を暮らすことも出来ない。あるいは画本を見て苦痛をまぎらかしたこともある。しかしいかに面白い画本でも毎日毎日同じ物を繰返して見たのでは十日もたたぬうちにもはや陳腐になって再び苦痛をまぎらかす種にもならない。・・・去年頃までは唯一の楽しみとして居た飲食の欲も、今はほとんど消え去ったのみならず、飲食そのものがかえって身体を煩わして、それがために昼夜もがき苦しむことは、近来珍しからぬ事実となって来た。・・・いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿馬鹿しくうるさいであろうが、苦しい時には苦しいというよりほかに仕方もなき凡夫の病苦談「いかにして日を暮らすべきか」「誰かこの苦しみを救うてくれる者はあるまいか」。³²⁾ (明治35年6月21日)

こうした子規の言葉の意味を考え、彼にとって苦しみの理由が何であったかを考えたい。子規にとっての死の問題は、死の恐怖とか、死後の安心といった問題ではなかったようである。先に述べたように、子規は自分には唯物論的な傾向があると言い、神仏を信じないと言う。未信者の自分には神の救いは届かないとも述べている。では「誰かこの苦しみを救うてくれる者はあるまいか」という言葉をどのように解すればよいのだろうか。子規には常人ではとうてい耐えられないほどの峻烈な痛みがあった。だからこれらの言葉は純粹にこうした痛みからの解放を願っている言葉のようにも思われる。子規には「死は恐ろしくはないのであるが、^{くろしみ}苦しみが恐ろしいのだ」³³⁾という言葉もある。

しかし先に引用したように、子規は一年前の『墨汁一滴』では、食物を租借する力が失われ、食事の楽しみも少なくなると、「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」³⁴⁾という疑問が湧いてくると述べている。彼にとって生きることは欲求を満ちし、楽しみを味わうことだったが、唯一残った楽しみの一つは食べることだった。だから食べる事が出来なくなることは「生き甲斐」や「生きる意味」が失

われ、自分が何のために生きているのかが分からなくなることである。

こう考えると子規の言葉は単なる激痛からの生理的な解放以上のものを意味するように思われる。いわば、激しい痛みや死を前にして、自分はどのように良いか分からないという迷い、戸惑い、苦しみである。子規は少なくとも一度自殺の誘惑に襲われたことがある。その際に彼は「さあたまらんたまらん」「どーしやうどーしやう」³⁵⁾という言葉が発している。ちょうど激しい磁気嵐にあってコンパスがあちらこちらと翻弄されるかのように、激烈な痛みや生命が尽きようとする事態に直面して、自分は何をどうしたらよいか、何をどう考えたらよいか分からないという苦しみではなかっただろうか。自分の心の向け方が分からないということではなかったか。

子規はここで「誰かこの苦を救うてくれる者はあるまいか」と問うている。この言葉は重要である。この言葉は自分以外のものに目を向ける一步を示している。子規はこれまでの人生においていつも自信満々で、自分の考えと能力に頼って生きてきた人である。仲間内ではいつもお山の大将であった。彼はこれまでこのような問いを心から発したことも、このような態度を示したこともなかった。私は先に子規の述べる「唯物論的傾向」には二つの側面があることを指摘した。一つは、精神が物質的基礎に完全に依存してあり、自由意志さえも認めないという側面、第二は、子規は自分が支配できないもの、自分を超えたものを認めたくないという人間中心的な側面である。その意味からすれば、「誰かこの苦を救うてくれる者はあるまいか」というこの言葉には、これまでの子規にはない言葉の響きがある。それは自分を超えた誰かに助けを求める言葉である。

7. 転機

子規が上のような文章を新聞『日本』に載せたところ、一人の読者から子規の許に手紙が届いた。それは次のような文面である。

拜啓昨日貴君の「病牀六尺」を読み感ずるところあり。左の數言を呈し候。

第一、かかる場合には天帝または如来とともにあることを信じて安んずべし。

第二、もし右信ずることあたわずとならば、人力の及ばざるところをさととりて、ただ現状に安んぜよ、現状の進行に任せよ、痛みをして痛ましめよ、大化のなすがままに任せよ、天地万物わが前に出沒隠現するに任せよ。

第三、もし右二者ともにあたわずとならば、号泣せよ、煩悶せよ、困頓せよ。しかして死に至らんのみ。小生はかつて瀕死の境にあり。肉体の煩悶困頓を免れざりしも、右第二の工夫によりて精神の安静を得たり。これ小生の宗教的救済なりき知らず。貴君の苦痛を救済し得るや否をあえて問う。病間あらば乞う一考あれ。³⁶⁾ (明治35年6月23日)

子規の書いた前後の文章を読むと、この読者からの手紙が子規にとって一つの転機になったようである。もちろん子規自身がこの手紙に書かれたようなことを考えなかった訳ではないだろうが、他の人から改めて指摘されることによって、たしかにそうかもしれないと考え、精神がどちらを向いてよいか分からない不安定な状態から一定の方向付けが得られたように思われる。彼は次のように書いている。

この親切なるかつ明哲平易なる手紙は甚だ余の心を獲たものであつて余の考もほとんどこの手紙の中に尽きて居る。ただ余にあつては精神の煩悶というのも、生死出離の大問題ではない。病気が身体を衰弱せしめたためであるか、脊髄系を侵されて居るためであるか、とにかく生理的に精神の煩悶を来すのであつて、苦しい時には、何ともかとも致しようのないわけである。しかし生理的に煩悶するとても、その煩悶を免れる手段はもとより「現状の進行に任せる」よりほかはないのである、号叫し煩悶して死に至るよりほかに仕方のないのである。(同上)

この一読者からの手紙をとおして、自分自身を率直に見つめよ、ありのままに受け入れよ、という示唆が与えられたものと考えたい。言い換えれば、「物事をありのままに見る」という姿勢である。しかし次節に見るように、このような精神態度は、実は正岡子規自身がこれまで大切にしてきた芸術上の信条でもあったのである。それは「写生」というものである。

ところでこの文章の後にはさらに次のような注目できる言葉が続く。

けれどもそれが肉体の苦である上は、程度の軽い時はたとえ諦めることが出来ないでも、慰める手段がないこともない。程度の進んだ苦に至っては、ただに慰めることの出来ないのみならず、諦めて居てもなお諦めがつかぬような気がする。けだしそれはやはり諦めのつかぬのであろう。笑え。笑え。健康なる人は笑え。病気を知らぬ人は笑え。幸福なる人は笑え。達者な両脚を持ちながら車に乗るような人は笑え。(同上)

身体の苦痛が激しいということは、逆にその激しい苦痛を感じている自分がそれだけはっきりと存在するということだろう。激痛は命の発する悲鳴であると同時に、命の存在確認でもある。子規の言う「やはり諦めのつかぬ」とはそのような意味であろう。すなわち、死を受け入れようとしながらも、やはり生きている自分を自覚してしまうということである。後に見るように、この事実が子規にとっての救いと希望の原理になったのかもしれない。ただ子規にとっては、失われつつある、しかし現に存在している生命を直視するよりほかはないであろう。

8. 写生

そうした一読者とのやり取りの三日後に、子規は新聞『日本』上に「写生」について次の文章を書いている。

写生といふ事は、画を画くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、この手段によらなくては画も記事文も全く出来ないといふてもよい位である。これは早くより西洋では、用ゐられて居つた手段であるが、しかし昔の写生は不完全な写生であつたために、この頃は更に進歩して一層精密な手段を取るやうになつて居る。しかるに日本では昔から写生といふ事を甚だおろそかに見て居つたために、画の発達を妨げ、また文章も歌も総ての事が皆進歩しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ写生の味を知らない人が十中の八、九である。画の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を称へる人が少くないが、それらは写生の味を知らない人であつて、写生といふことを非常に浅薄な事として排斥するのであるが、その実、理想の方がよほど浅薄であつて、とても写生の趣味の変化多きには及ばぬ事である。・・・理想といふ事は人間の考を表はすのであるから、その人間が非常な奇才でない以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。・・・これに反して写生といふ事は、天然を写すのであるから、天然の趣味が変化して居るだけそれだけ、写生文写生画の趣味も変化し得るのである。写生の作を見ると、ちよつと浅薄のやうに見えても、深く味はへば味はふほど変化が多く趣味が深い。³⁷⁾(明治35年6月26日)

子規は俳句、和歌などの日本文学の改革者として大きな業績を残したが、そうした子規の議論を検討すると、結局は「写生」に行き着くのである。しかし子規の写生が何であつたかは、日本文学上の大問題である。なぜならば、この問題は、彼の弟子である高浜虚子、河東碧梧桐らの俳句、伊藤左千夫、斎藤茂吉らの短歌運動など、子規の影響下にある日本近代文学の意義に関係するからである。この点についてこれまでに多くの研究が行われている³⁸⁾。そこで子規にとって写生とは何だったかについて本稿でも多少の紙幅を割きたいと思う。子規の写生の考えにはいくつかの要素が含まれている。

(1) まず具体的なものを重視し自然を愛する子規

自身の個人的傾向がある。子規はもともと物事を抽象的に考えることが苦手で、具体的に即して考える傾向があったようである。彼が哲学に挫折したのもそうした理由によるものである³⁹⁾。また彼には、年少の頃から自然を愛し、脱俗的な仙人的生活にあこがれる傾向があった⁴⁰⁾。子規の文章を読むと、美しい風物に接すると「うっとりする」という言葉がよく出てくる。

(2) 子規の日本芸術改革の基本精神である。従来の日本芸術は、例えば、和歌における「本歌取り」のように、誰かが作ったものを技巧的に作り替える知的遊戯や剽窃のようなことに終始したり、日本画を描く場合のように、鶯はこうで、虎はこのように描くものだといった伝統的な様式を満たすことで満足していた⁴¹⁾。子規が自己の日本文学改革の嚆矢『獺祭書屋俳話』において激しい言葉で述べるとおりである。「弟子は師より脱化し來り、後輩は先哲より剽竊し去りて作爲せる者、比々皆是れなり。其中に就きて石を化して玉と爲すの工夫ある者は之を巧とし、糞土の中よりうち蟲を掴み來る者は之を拙とするのみ。終に一箇の新觀念を提起するものなし。」⁴²⁾このように従来の日本芸術は伝統に囚われるあまり、美的感動の実感を忘れてしまい、瀕死の境にあるというのが子規の見立てである。これに対する子規の主張は結局、芸術は美的感動の源泉である現実の直観、体験そのものに立ち帰って、そこに新たな美や優れた趣味を見出すべきだということであろう。子規が自らの心情を率直に歌う万葉集や平賀元義らを称揚したことも同じ理由による⁴³⁾。

こうした思考法に、子規が東大哲学科学生としてブッセ教授から学んだカント哲学の影響を感じ取ることができる⁴⁴⁾。カントは「物体は不加入的である」のように、単に頭の中で主語概念〔物体〕を分析して、述語概念〔不加入的である〕を引き出すにすぎない「分析判断」に対して、「三角形の内角の和は180度である」のように、いったん概念や考えの外に出て、直観において図形を描くことにより、主語概念〔三角形の内角の和〕と述語概念〔180度である〕の新たな結合を発見する「総合判断」の重要性を強調した⁴⁵⁾。この点から見れば、子規の述べる写生とは、

従来の日本芸術のように単に観念の中の捻くり回しに終始するのではなく、ものをよく見て、現実の直観、体験に立ち帰り、そこに新たな美や見方を発見することである。実際、子規が『獺祭書屋俳話』を書いたのは、彼がカント哲学と苦闘していた時期の直後に当たる⁴⁶⁾。

このように考えると「写生」という語は子規の活動の最初の時期には使用されなかったかもしれないが、写生的態度は彼の芸術活動の根幹に関係するものだと言ってよいだろう。

(3) 子規の写生は主観を排して現実を写すのみであるとする誤解が生じることがある。子規はそうではないと言う。次のような議論がある。最初子規は松尾芭蕉を批判したが、後に芭蕉から俳句の新たな可能性に気づかされることになった。「古池や蛙飛び込む水の音」このありのままに詠まれた句には、何らの感情も詠まれてはいない。しかしこの句を味わうことを通して、そこに書かれていない静寂などの感興が呼び起こされるのである。子規はこの真理を「一部によって全体を表す」⁴⁷⁾と表現している。別の機会にはこれを、「芭蕉が蛙の上に活眼を開きたるは即ち自然の上に活眼を開きたるなり」、「芭蕉は終に自然の妙を悟りて工夫の卑しきを斥けたり」⁴⁸⁾とも表現している。芭蕉は飾り立てた饒舌さによってではなく、描写の「自然さ」を通して、同時にその背景にある多くのものを表現することができたのである。子規が芭蕉から学んだことは、簡素で具体的な描写を通して、言外の多くの感動を表現することである。子規は主観的感情を否定したわけではない⁴⁹⁾。主観的感情を否定することは芸術自体を否定することである。

(4) 子規の写生の考えは、西洋絵画を学んだ中村不折らの友人の画家の指導によって生まれたという見解がある。西洋画を学ぶ人はまずデッサンから始める。子規はこのように芸術は一般にまず物をよく見ることから始めるべきであると考え⁵⁰⁾。しかし絵を描く人が何の工夫もなく写真機のようにただ現実を写すのではなく、構図や配置や取捨選択の工夫をするように、文学における写生も、現実をよく見ると共に、一定の趣向を考えるのは当然のことである

と考える。こうした現実をよく見ること、構図や配置や取捨選択などの趣向の重要性を、子規は西洋絵画から学ぶのである⁵¹⁾。

(5) さらに子規の写生は、坪内逍遙、ゾラなどの自然主義文学の流れに位置づけられるとする見解もある⁵²⁾。たしかに子規は若い頃に坪内逍遙の『当世書生気質』に親しみ、ゾラ『ナナ』を読んだという記録もある⁵³⁾。子規自身も「写生文」、「叙事文」を提唱して、物事を平明、写生的に描くことに特有の味わいがあると述べている⁵⁴⁾。その点で坪内らの影響を受けたことは確かであるが、人間の暗部や醜さを赤裸々に暴き立てる、いわゆる自然主義文学とは一線を画するように思われる。

以上のように、正岡子規にとって「写生」とは、単なる観念上の遊戯ではなく、現実の直観や美的感動の源泉に立ち返って、新たな美を発見することであり、具体的なものを通して美的感動を表現することであった。しかし彼の病気が深まるにつれて、彼の写生の考え方に本来含まれていた一つの側面が強く前面に出てきたと思われる。

(6) それは偏見、イドラ、先入見、思いこみを排するということである。人間は事実のみを見ようとしても、物事を一定の枠組み、色眼鏡によって見ている可能性がある。それは偏見、先行見と言ってよいが、ベーコンも言うように、その内には伝統として歴史的・社会的に形成されてきたものもあるし、自分の都合のよいことには注意するが、都合の悪いことは簡単に無視するなどの人間自身の傾向から生まれたものもあるだろう⁵⁵⁾。もともと子規の写生論は、伝統追隨的で一定の型にはまった「月並俳句」を批判し、新鮮な美の発見をもたらす写生的な俳句を推奨するものだった。しかしそれだけでなかった。子規の文章を時系列的に読んでいくと、病気の深まりと共に生のインタレストが弱まるにつれて、そして物事をありのままに見ることによって、彼が若い頃に持っていた先入見が次第に取り除かれていくようすがはっきりと読みとれるのである。

以上のように考えると、子規のいう「写生」とは、単なる頭の中の捻くり回しではなく、現実在即して「物事をありのままに見つめること」であると言っ

てよいだろう。このように子規にとって写生は大切な芸術上の信条であったが、彼が自らの病気に向かう際も、写生は重要な意味を持っていたと思われる。先に述べた一読者からの手紙は、子規に対して、自分の人生、自分の命をありのままに見つめよと促したものである。たしかにそれは子規自身の考えにかなうものであった。

9. 常識批判

一読者からの手紙を転機にして、子規の文章には変化が生じたように感じられる。文章が悠々としたものになり、それ以前のように何かおどおどしたところ、ぎすぎすしたところがなくなった。一見すると意外なことであるが、子規は亡くなる約2ヶ月前に、一般社会の常識を正す随筆をいくつか書いている。ここで意外だというのは、死を目前にした人が世の中の一般常識を正すような悠長なことをするだろうかと思われるからであるが、これもまた死を目前にした子規の心境の表れであると考えられる。

死を目前にした子規にとって、もはや怖いものは何もないのである。なぜならば、我々ならばふつう殺すぞと脅されるならば、ひるんで言いたいことを言わないでしまうこともあるが、この時期の子規を脅すことは誰にもできないからである。なぜならば、殺されるならばそれでも結構ですよということになるからである。したがって子規は人間や世の中を恐れて言いたいことを差し控えるようなことはしない。世の中をありのままに観察し、何ものにも囚われることなく自らの見解を綴ってゆく。

女子教育

子規は女子教育の必要性を説く。一般の常識では、男子は外に出て働いて家計を支えるから教育が必要であるが、女子は家庭を守るだけなので、家事程度ができればよいのであって、教育は必要ないというものであろう。しかし子規は女子にこそ教育が必要だというのである。その理由を子規の文章から見てみよう。

家庭の教育ということは、男子にももとより必要であるが、女子にはことに必要である。・・・ことに女子にとっては最も大切な一家の家庭を司って、その上に一家の和樂を失わぬようにして行くことは、多くは母親の教育いかにによりて善くも悪くもなるのである。ところが今までの日本の習慣では、一家の和樂ということが甚だ乏しい。それは第一に一家の団欒ということの欠乏して居るのを見てもわかる。一家の団欒ということは、普通に食事の時を利用してやるのが簡便な法であるが、それさえも行われて居らぬ家庭が少なくはない。まず食事に一家の者が一所に集る。食事をしながら雑談もする。食事を終える。また雑談をする。これだけのことが出来れば家庭はいつまでも平和に、どこまでも愉快であるのである。これを従来の習慣によってせぬというと、その内の者、ことに女の子などは一家団欒して楽しむべきものであるということを知らずに居る。そこで他家へ嫁入して後も、家庭の団欒などいうことをすることを知らないで、殺風景な生活をして居る者がある。・・・かようなことでは一家の妻たる者の職分を尽したとはいわれない。それゆえに家庭教育の第一歩として、まず一家団欒して平和を楽しむということぐらいから教えて行くのがよかろう。一家団欒ということとはただに一家の者が、平和を楽しむという効能があるばかりでなく、家庭の教育もまたこの際に多く施されるのである。一家が平和であれば、子供の性質も自ずから平和になる。父や母や兄や姉やなどの雑談が、有益なものであれば子供はそれを聴いてよき感化を受けるであろう。・・・高尚な品性を備えた人の談ならば、無駄話のうちにも必ずその高尚なところを現して居るので、これを聴いて居る子供は、自ずから高尚な風に感化せられる。この感化は別に教えるのでもなく、また教えられとも思わないのであるが、その深く浸み込むことは学校の教育よりも、更に甚だしい。⁵⁶⁾ (明治35年7月18日)

人間の幸福は主に家庭にあり、家庭の平和が保たれていれば、子供も平和で品性もよくなる。しかし

そうした家庭の平和や福祉を気遣うためには、女子にかなりの程度の教育や教養が必要だというのである。家庭がよく治まれば、人が平和に育ち、人が育てば、社会もよく治まり、みんなが幸福になると考えるのである。家族が危機の場合にも、家族をあずかる女性がよい判断力を働かせることが必要になる。この点でも女性に良い教育が必要である。

これは常識の逆転である。なぜこのような逆転が生じたかと言えば、死を前にした子規にとって、真に重要なことと虚栄に属するものの違い、より重要なことが見極められるようになったからに他ならない。一般常識において教育は男子に必要で、女子には必要ないという考えが生まれたのは、男性が世に出て仕事をして養わなければならないからである。たしかに金銭も必要であるが、ある程度金銭があれば、大切なことはもっと他にある。子規は金銭の多さよりも、家庭が平和で団欒を楽しむことが人間の深い幸福につながることを認識するようになったのだと思われる。それは価値観の転換であり、虚栄と真の必要の見分けができるようになったということであろう。ではなぜそのような見方の転換が可能になったのか。死を近く感じるようになるにつれ、物事を欲望や利害関心に引かれて見るのではなく、物事をありのまま見ることができるようになったからだと思われる。

ケア論

20世紀も末になってケアが盛んに論じられるようになった。医療における看護職の専門性は、医師の助手としての医療上の補助作業にでなく、患者を気遣い、世話するという意味でのケアにあると見なされるようになってきた。こうした議論はもちろん適切なものであるが、驚くべきことは、正岡子規がこうしたケアの議論をすでに100年以上も前に展開していたことである。少し長いが引用する。

病気の介抱に精神的と形式的との二様がある。精神的の介抱といふのは看護人が同情を以て病人を介抱する事である。形式的の介抱といふのは病人をうまく取扱ふ事で、例へば薬を飲ませるとか、

繃帯を取替へるとか、背をさすとか、足を按摩するとか、着物や蒲団の工合を善く直してやるとか、そのほか浣腸沐浴は言ふまでもなく、始終病人の身体の心持よきやうに傍から注意してやる事である。食事の献立塩梅などをうまくして病人を喜ばせるなどはその中にも必要なる一カ条である。この二様の介抱の仕方が同時に得られるならば言分はないが、もしいづれか一つを択ぶといふ事ならばむしろ精神的同情のある方を必要とする。うまい飯を喰ふ事は勿論必要であるけれども、その介抱人に同情がなかつた時には甚だ不愉快に感ずる場合が多いであらう。介抱人に同情さへあれば少々物のやり方が悪くても腹の立つものでない。続けて、

けれども同情的看護人は容易に得られぬ者とするれば勿論形式的看護人だけでもどれだけ病人を慰めるかわからぬ。世の中に沢山ある処のいはゆる看護婦なるものはこの形式的看護の一部分を行ふものであつて全部を行ふものに至つては甚だ乏しいかと思はれる。勿論一人の病人に一人以上の看護婦がつききりになつて居るときは形式的看護の全部を行ふわけであるが、それもよほど気の利いた者でなくては病人の満足を得る事はむづかしい。看護婦として病院で修業する事は医師の助手の如きものであつて、此処にいはゆる病気の介抱とは大変に違ふて居る。病人を介抱すると言ふのは畢竟病人を慰めるのにほかならぬのであるから、教へることも出来ないやうな極めて些末なる事に気が利くやうでなければならぬ。例へば病人に着せてある蒲団が少し顔へかかり過ぎてゐると思へばそれを引き下げてやる。蒲団が重たさうだと思へば軽い蒲団に替へてやるとか、あるいは蒲団に紐をつけて上へ釣り上げるとかいふやうなことをする。病人が自分を五月蠅がつて居るやうだと思へば少し次の間へでも行つて隠れて居る。病人が人恋しさうに心細く感じて居るやうだと思へば自分は寸時もその側を離れずに居る。あるいは他の人を呼んで来て静かに愉快地話などをする。あるいは病人の意外に出でて美しき花などを見せて喜ばせる、あるいは病人の意中を測つて食ひたさう

などいふものを旨くこしらへてやる。筒様な風に形式的看護と言ふてもやはり病人の心持を推し量つての上で、これを慰めるやうな手段を取らねばならぬのであるから、看護人は先づ第一に病人の性質とその癖を知る事が必要である。⁵⁷⁾ (明治35年7月20日)

正岡子規はどうして現在のケア論にも通じるような見解に達することができたのだろうか。こうした介護論は、介護、看護なしには一日も生活出来ない彼が、病苦と死に面しながら、見栄や伊達などを払い去って、自分自身を、そして人間一般を振り返り、反省することによって出てきた見方である。激痛に苛まれる子規には、自分にとってあるいは人間にとって大切なことは何かが見えていたというべきであらう。これもまた正岡子規が自分自身や社会の在り方をありのままに見つめたことの証である。

子規を介護した妹の律は、自ら離婚した後、兄に忠実に仕えた人であったが、子規は彼女を強情で同情心が無いと感じた。しかし子規は介護を単に自分一人だけの問題として捉えたわけではない。もしそうならば、それは単なる病者の愚痴のようなものに終わっていただろう。むしろ子規は自分自身の問題を通して、人間一般にまでも妥当する真実を見抜くことができた。子規はわずか畳一畳分の「病床六尺」という狭い世界に生きながらも、物事をありのままに見ることによって、もっと遠い人々や、もっと遠い未来の先までも見据えていたと言えるのではないだろうか。

10. 最晩期の言葉と絵が語るもの

それでは子規は自分自身の苦しみとそこからの救出についてはどのように考えたのだろうか。彼が亡くなる約1ヶ月前に書きたいいくつかの言葉と絵が残っている。そのころ彼は枕もとにある草花や果物などを丹念に写生することを楽しみとしたが、次のような意味深い言葉を残している。

草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分つて来るやうな気がする。⁵⁸⁾ (明治35年8月7日)

或る絵具と或る絵具とを合せて草花を画く、それでもまだ思ふやうな色が出ないとまた他の絵具をなすつてみる。同じ赤い色でも少しづつ色の違ひで趣が違つて来る。いろいろに工夫して少しくすんだ赤とか、少し黄色味を帯びた赤とかいふものを出すのが写生の一つの楽しみである。神様が草花を染める時もやはりこんなに工夫して楽しんで居るのであらうか。⁵⁹⁾ (明治35年8月9日)

この時期に描かれた絵がいくつか残されている。茄子の絵を見てみる⁶⁰⁾。実の部分の紫色と、へたの部分の色の少し薄くなったところの色の加減が絶妙で、茄子の形もよく観察して描かれている。それらは全体としてどっしりとした質感を感じさせている。実に美しくみずみずしい茄子の絵ではないだろうか。



次に石竹 (ナデシコ) の花の絵を見てみる⁶¹⁾。茎は注意深くしっかりとした線で描かれている。葉は表と裏の色の違いを示し、葉脈まで描かれている。花弁はナデシコ特有のギザギザした形状も正確に描かれている。この絵のナデシコは可憐ではあるが、凜とした力強さを感じさせる。



これらがその時の正岡子規が見ていた世界なのである。私たちは子規が描いた絵を通して、子規が見ていた世界を垣間見ることができる。この点でこれらの絵を一年前に描いた絵と比較してみるとは有益である。先の絵は、一種の文人画的な味わいはあるが、弱い線で、粗略にスケッチ風に描かれていた。また何か感情というヴェールがかかってぼやけている印象があった。それに対して、今回の絵では、そのようなヴェールが取り除かれ、対象を明確に正確に描いていることが分かる。そして、このありのままに見るといふ子規の姿勢によって描かれた世界は、美しさとみずみずしさに満ちた世界である。

私たちも自己自身を反省してみると、路傍の一輪の花をゆっくりじっくり観察することは稀であろう。私たちにはいつも何かの用事があり、そんな暇はないのである。また私たちには溢れる生命力があり、路傍の一輪の花の事など気にもとめないのである。しかし私たちもまた何かに失敗し、気落ちした心で、赤い夕日を見たことはなかっただろうか。私たちも子規と同じように自分自身の燃える生命力を小さくして、路傍の一輪の花をありのままにじっくり観察すると、そこには実に美しい世界があることに気づかされる。正岡子規の絵はそのことを私たちに気づかせてくれる。

しかし子規にとって草花の写生はそれだけのものではなかった。彼は写生をしながら「造化の秘密が

分かるような気がする」、「神様もこのようにして楽しんでるのであろうか」という言葉を残している。この言葉は何を意味するのであろうか。子規は唯物論の傾向が強く、宗教嫌いではなかったのだろうか。ちょうどこのように写生を楽しんでいる時期、彼は次の言葉を書いている。

梅も桜も桃も一時に咲いて居る、美しい岡の上をあちこちと立つて歩いて、こんな愉快な事はないと、人に話した夢を見た。睡眠中といへども暫時も苦痛を離れる事の出来ぬこの頃の容態にどうしてこんな夢を見たか知らん。⁶²⁾ (明治35年8月10日)

私は子規の心の動きを次のように理解してみたい。物事をありのままに見ると、野原に咲く一輪の草花も、これほどにまで可憐で美しい。これはまぎれもない事実である。では自分の身体はどうだろうか。病に打たれ、身体各部は腐敗し、激痛に苛まれ、自分はこれから死に向かおうとしている。しかしもし野の一輪の花でさえこれほどにまで美しく、すばらしいのであれば、自分の病んだ生命、身体もまた美しく、可憐なのではないだろうか。もしこのように自然を美しく造られた創造者がおられるならば、自分の生命、身体も決して無駄に終わることはないだろう。そこには何か明るい希望があるのではないだろうか。私は正岡子規の心の奥底に働いている推論を以上のように推測するのである。

先に子規の言う唯物論的な傾向の中には、精神が身体に完全に依存しているという見方と、自分を越えた存在を認めない自己中心的な見方の二つの面があることを指摘した。しかし子規が病苦の中で「誰か自分をこの苦から助けてくれる者はいないのか」と助けを求めたとき、この自己を中心とする見方を離れたと理解するべきであろう。そのうえで彼は、目の前の世界を、社会を、野の草木を、そして自分自身の生命をありのままに見つめたのである。

彼がここで創造者という意味の言葉を何度か使っていることは偶然ではないと思われる。子規は絵を描くという行為を行いながら、創造者が事物を創造

する行為もこんなものだろうかと考えたのである。自然をありのままに観察することによって、たしかにそこには微妙な色合いがあり、さまざまな部分が秩序正しく組織されていることに気づいたことだろう。ここで子規はもはや自分を越えた存在を認めないという倨傲な態度は採っていないことが分かる。

正岡子規のこの箇所については何人かの人が注目しているようである⁶³⁾。ただ彼の心を理解できるのは、ありのままに見る写生の心に基づくこのような仕方においてはではないかと考えられる。これらの言葉は明治以降の日本人の死生観にも影響を与えた可能性がある。子規の親友であった夏目漱石の「則天去私」、ハンセン病文学者の北条民雄の文章にも正岡子規の影響を読みとることができるのではないかとと思われる。

子規はありのままに見る写生によって、俳句や和歌を再生させることができた。それは日本における美の源泉の再発見であった。それと同時に子規の写生は、子規という人間自身の生き方や死に方をも導く手がかりとなったのである。私たちが病者である子規が残した文学を読むことによって、自らの人生や社会や医療に関する大きな示唆と新たな見方を学ぶことができる。

11. 結びに代えて

私たちは「病の文学」を読むという課題を、正岡子規の晩年の随筆を中心に行ってきた。考察を終わって、こうした病の文学を読むという方法論的な観点から、この研究を振り返って考察しておきたい。

今回の考察は一人の人間の書いた作品や手記を読むことを通して、追体験をとおしてその人の苦しみや思いを理解しようとするものだった。健康な人が病者を理解することは簡単なことではないかもしれない。しかしその困難さの多くの部分は、自分とは関係ないとか、自分も巻き込まれるのは嫌だといった心理的障壁に由来するように思われる。ディルタイが述べたように、その人の人生を経歴や本人の言葉をとおして可能なかぎり把握し(帰納)、解釈者が

自分をその人の立場に置こうと努め（自分を相手の立場に置くこと）、自分であればどう感じるかを感じ取る（追体験）ことができる。そして著者を内的に動かしている主要な契機を見出し、それを補助線のように用いつつ、さらに他の箇所を読み進めることができる（生のカテゴリー）。このように試行錯誤しつつ読解を進めることによって、病者の心をかかなりの深いところまで理解できるのではないかと考えるのである。

たしかに私たちには正岡子規という愛すべき隣人が残した最適な資料があった。多くの病者はこれほどの一貫した多くの言葉を残しているわけではない。また子規の研究成果を病者全体に単純に一般化することにも注意が必要だろう。しかしこうした研究をこれからも継続して行っていくならば、病における人間とはいかなるものかについて次第次第に理解を深めることができるだろう。そうした病における人間理解は、科学技術的に進歩した現代の医学医療を支える人間学的な土台になるだろうと期待される。またこのように追体験と共感に基づいて病者を理解しようと努める方法は、医療者が患者に接する際の重要な導きになると考えられる。

<完>

注

- 31) 正岡子規 (1902b), P.69
- 32) 正岡子規 (1902b), P.69-71
- 33) 正岡子規 (1901-1902), P.106
- 34) 正岡子規 (1901), P.114-115
- 35) 正岡子規 (1901-1902), P.104
- 36) 正岡子規 (1902b), P.72-74
- 37) 正岡子規 (1902b), P.76-77
- 38) 子規の写生に関する現在の研究状況以下で概観されている。下田祐介 (2009), p.137-147
- 39) 正岡子規 (1901), P.148-149
- 40) 松山市教育委員会編 (1979), p.34-43
- 41) 正岡子規 (1896), p.73-74
- 42) 正岡子規 (1895), p.166
- 43) 正岡子規 (1889a), p.15, 33-36; 正岡子規 (1901), p.24-39
- 44) 立川淳一もカントの時間・空間論が子規の俳句に与えた影響について考察している。立川淳一 (2002), p.34-38
- 45) 子規が証言する、ブッセの講義テーマ「サブスタンスのレアリテーはあるかないか」も、子規が総合判断の重要性を学んだ可能性を示唆している。この講義はアプリ

オリな総合判断の一つ「実体の持続性」の原則に関するものであろう。正岡子規 (1901), p.148; Kant (1781), B.10-18

- 46) 子規が明治24年に行われたカントに関するブッセの講義がよく理解できず、哲学をあきらめて国文学科へ転科したのは翌25年で、『癩祭書屋俳話』の連載を開始したのもこの25年である。正岡子規 (1901), p.148-150, 久保田正文 (1967), p.94
- 47) 正岡子規 (1889a), p.95-96
- 48) 正岡子規 (1889b), p.116, 119
- 49) 正岡子規 (1896), p.29-30
- 50) 正岡子規 (1898c)
- 51) 松井貴子 (2002), p.164-181
- 52) 服部嘉香 (1974)
- 53) 正岡子規 (1889b), p.88
- 54) 正岡子規 (1900)
- 55) ベーコン (1978), p.69-113
- 56) 正岡子規 (1902b), p.110-112
- 57) 正岡子規 (1902b), p.113-115
- 58) 正岡子規 (1902b), p.141
- 59) 正岡子規 (1902b), p.142
- 60) 松山市立子規記念博物館 (1961), p.42
- 61) 松山市立子規記念博物館 (1961), p.47
- 62) 正岡子規 (1902b), p.143
- 63) 塩川京子 (1996), P.123-124, 154; 斎藤茂吉 (1947), p.115-116

参考文献一覧

1. Kant (1781), *Kritik der reinen Vernunft*
2. ベーコン (1978), 『ノヴム・オルガヌム 新機関』, 桂寿一訳, 岩波文庫.
3. 下田祐介 (2009), 「<研究展望>正岡子規: その研究と課題」, 『上智大学国文学論集』, 42 卷, p.137-147
4. 久保田正文 (1967), 『正岡子規』, 人物叢書, 吉川弘文館.
5. 塩川京子 (1996), 『正岡子規の面影』, 京都新聞社.
6. 斎藤茂吉 (1947), 『短歌写生の説』, アララギ叢書, 永言社.
7. 服部嘉香 (1974), 「子規と自然主義」, 『日本文学研究』10, 梅光学院大学, p.77-82
8. 松井貴子 (2002), 『写生の変容: フォンタネージから子規、そして直哉へ』, 明治書院.
9. 松山市教育委員会編 (1979), 『伝記 正岡子規』, 松山市立子規博物館友の会.
10. 松山市立子規記念博物館 (1961), 『子規の絵』.
11. 正岡子規 (1888), 「哲学の発足」, 『子規全集 第十巻』, 1975 年, 講談社, p. 39-42
12. 正岡子規 (1889a), 「古池の吟」, 『筆まか勢 第一編』 (明治二十二年), 『子規全集 第十巻』, 1975 年, 講談社, p.95-96
13. 正岡子規 (1889b), 「ゾラと春水」, 『筆まか勢 第一編』 (明治二十二年), 『子規全集 第十巻』, 1975 年, 講談社, p.88
14. 正岡子規 (1895), 「癩祭書屋俳話」, 『子規全集 第四巻』, 1975 年, 講談社, p.158-220
15. 正岡子規 (1896), 『松蘿玉液』, 岩波文庫, 1984 年, 岩波書店.

-
16. 正岡子規 (1898a), 『歌よみに与ふる書』, 岩波文庫, 1955年, 岩波書店.
 17. 正岡子規 (1898b), 「古池の句の辨」, 『子規全集 第五卷』, p.94-120
 18. 正岡子規 (1898c), 「写生、写実」, 『ホトトギス』(明治31年12月)
 19. 正岡子規 (1900), 「叙事文」, 『日本付録週報』(明治33年1月29日)
 20. 正岡子規 (1901), 『墨汁一滴』, 岩波文庫ワイド版, 2005年, 岩波書店.
 21. 正岡子規 (1901-1902), 『仰臥漫録』, 岩波文庫ワイド版, 1991年, 岩波書店.
 22. 正岡子規 (1902a), 「病床苦語」, 『子規全集 第十二卷』, 1975年, 講談社. p. 224-324
 23. 正岡子規 (1902b), 『病床六尺』, 岩波文庫ワイド版, 1993年, 岩波書店.
 24. 立川淳一 (2002), 『子規の苦闘』, 文芸社.